

『三四郎』キーンワードの合意

—「ストレイシープ」「ヘリオトロープ」「森の女」—

山 本 彩

序

女は紙包を懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛て、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がふんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの壇。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるさうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。

「御存じなの」と云ひながら、一重瞼を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、却つて遠く

にあるのを氣遣い過ぎた眼付である。其癖眉丈は明確落ちついてゐる。三四郎の舌が上顎へ密着して仕舞つた。

女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞兼る程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加へて、云つた。

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」聞き取れない位な声であつた。それを三四郎は明らかに聞き取つた。三四郎と美禰子は斯様にして分れた。(十二)

私が夏目漱石の「三四郎」という作品を、ただに世に知られる一作品として読み過すことがなかつたのは、偏にこの教会前での三四郎と美禰子の遣り取りに疑問を感じたからである。この場面を読んだ時に、私の中で、先行研究の大半を占めている解釈の一端が崩れた。例えば、

助川徳是氏の「美禰子が結婚の相手として野々宮を考え
ていた」(注1)という意見や、熊坂敦子氏の「三四郎を
誘惑することによって野々宮君の愛をつなぐはず」(注
2)という意見である。助川氏や熊坂氏が論ずるように、
美禰子は三四郎に対して本当に恋愛感情を有していなか
ったのだらうか。私はこの場面から、三好行雄氏に代表
される「三四郎への愛は美禰子のなかに確実にあつた」
(注3)という意見が正しいのではないかと考えた。美禰
子が愛していたのは誰であつたのだらうか。

この問題について考察した結果、私は美禰子が愛して
いたのは当初野々宮だつたが、その愛はやがて三四郎に
移つたという結論に至つた。その証拠として、三四郎と
美禰子の間で交わされる遣り取りと、そこに存在する
「ストレイシープ」、「ヘリオトロープ」、「森の女」の三
つのキーワードからである。それらを読み解きながら、
三四郎と美禰子の関係を裏付けたい。

一、「ストレイシープ」について

「ストレイシープ」は、菊人形を見に行つた場面以後
全体を通して見られるが、この語の表記は「迷子」(含
「迷へる子」)、「stray sheep」、「迷羊」の三つが混同され
ている。尚、いずれも「ストレイシープ」というルビが

振られているので、本論では、「ストレイシープ」に統
一して論じる。

「迷子」(含「迷へる子」という表記で出てくる場面は、
以下の通りである。

「迷子」

女は三四郎を見た儘で此一言を繰返した。三四郎は
答へなかつた。

「迷子の英訳を知つて入らしつて」

三四郎は知るとも、知らぬとも云ひ得ぬほどに、此
問を予期してゐなかつた。

「教へて上げませうか」

「え、」

「迷へる子——解つて？」

(中略)

迷へる子といふ言葉は解つた様でもある。また解ら
ない様でもある。解る解らないは此言葉の意味より
も、寧ろ此言葉を使つた女の意味である。

(中略)

立ち上がる時、小さな声で、独り言の様に、

「迷へる子」と長く引つ張つて云つた。三四郎は無
論答へなかつた。

(中略)

あまりに下駄を汚すまいと念を入れ過ぎたため、力が余つて、腰が浮いた。のめりさうに胸が前へ出る。其勢で美禰子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた。「迷へる子」と美禰子が口の内で云つた。三四郎は其呼吸を感じる事が出来た。(五)

(傍線筆者、以下同)

「stray sheep」という表記が出てくる場面は、以下の二場面である。

与次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上から覗き込んだ。といふ字が無暗にかいてある。

「何だこれは」

「講義を筆記するのが厭になつたから、いたずらを書いてゐた」

「さう不勉強では不可。カントの超絶唯心論がパークレーの超絶実在論にどうだとか云つたな」

「どうだとか云つた」

「聞いてゐなかつたのか」

「いや」

「全然stray sheepだ。仕方がない」

(中略)

其他は不得要領に終つた。其代り此時間にはstray sheepといふ字を一つも書かずに済んだ。(六)

下宿へ歸つて、湯に入つて、好い心持になつて上がつて見ると、机の上に絵端書がある。小川を描いて、草をもちやもちや生やして、其縁に羊を二匹寝かして、其向ふ側に大きな男が洋杖を持つて立つてゐる所を写したものである。男の顔が甚だ獯猛に出来てゐる。全く西洋の絵にある悪魔を模したもので、念の爲め、傍にちやんとデギルと仮名が振つてある。表は三四郎の宛名の下に、迷へる子と小さく書いた許である。三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟つた。のみならず、端書の裏に、迷へる子を二匹描いて、其一匹を暗に自分に見立て、くれたのを甚だ嬉しく思つた。迷へる子のなかには、美禰子のみではない、自分ももとより這入つてゐたのである。それが美禰子の思はくであつたと見える。美禰子の使つたstray sheepの意味が是で漸く判然した。(七)

「迷羊」という表記で出てくる場面は、以下の三場面である。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあつた。所は広田先生の二階であつた。田端の小川の縁に坐つた事もあつた。其時も一人ではなかつた。迷羊。

迷羊。雲が羊の形をしてゐる。(十二)

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの塚。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らか懸る。(十二)

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が悪い」

「ぢや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の内ウチノナで迷羊メヒヨウ、迷羊メヒヨウと繰り返した。(十三)

「ストレイシープ」は三つの表記に使い分けられ、物語の順を追って変化している。ではどのように使い分けられているのかというと、「迷子」(含「迷へる子」)は美禰子が使用しており、「stray sheep」「迷羊」は三四郎が使用している。同じ絵端書の場面でも美禰子は「迷へる子」と書いているのに対し、三四郎は「stray sheep」を使用している。

美禰子は三四郎に「迷子」の英訳を尋ね、自ら「迷へる子シム」と訳す。「ストレイシープ」とは「迷羊」のことで、『新約聖書』マタイ伝一八章にある、「百匹の羊のうちの一匹が迷えば、飼い主は九九匹を残してもその一匹を捜し求める」というキリストの語る喩え話からの引用(注

4)とされている。三四郎が「解る解らないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である」と考えているように、ここでわざわざ「子」を「羊」に置き換えて新約聖書から引用した意味とは何か。このたとえ話から考えると、九十九匹を野々宮兄妹、広田の三人に見立て、その三人を置いて一匹の迷羊である美禰子を追いかけてきた羊飼いの三四郎とも解釈できる。だが、この解釈では「羊を二匹寝かして」いる説明がつかない。小川の縁に羊が二匹いるのだから、そのまま美禰子と三四郎を羊に表していると考えていいだろう。しかし、美禰子と三四郎の決定的な別れとなる会堂前の場面では、あれだけ「ストレイシープ」を使用していた美禰子が、「ストレイシープ」ではなく、「ヘリオトロープ」を持ち出している。それに対して、三四郎は「ヘリオトロープ」によって「ストレイシープ」を連想している。この時点で美禰子は既に「ストレイシープ」ではなく、三四郎のみが「ストレイシープ」なのである。この時の美禰子は、結婚が決まっており、野々宮への想いにも、三四郎への想いにも決着をつけているのに対して、三四郎は結婚が決まった美禰子への報われない想いを断ち切れていない。このことから考えると、「ストレイシープ」とは結婚問題で迷っている美禰子と、美禰子を愛しているながら、郷里の御光との現実的な結婚を勧められる三四郎を指し、

自分と同じく選択に迷っていることを、羊を二匹並べて書くことで表していたともとれるのである。

二、「ヘリオトロープ」について

これは、

今度は三四郎の方が香水の相談を受けた。一向分らない。ヘリオトロープと書いてある壺を持って、好加減に、これはどうですと云ふと、美禰子が、「それに為ませう」とすぐ極めた。(九)

と、三四郎が美禰子達に適当に選んだ香水である。

しかし、この香水が後にまた登場する。それが女は紙包を懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛て、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がぷんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの壺。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるさうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。

「御存じなの」と云ひながら、二重瞼を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、却つて遠くにあるのを氣遣い過ぎた眼付である。其癖眉丈は明確落ちついてゐる。三四郎の舌が上顎へ密着して仕舞つた。

女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞兼ねるほどの嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加へて、云つた。

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」聞き取れない位な声であつた。それを三四郎は明らかに聞き取つた。三四郎と美禰子は斯様にして分れた。(十二)

という場面である。

三四郎が「適当に」選んだ香水を、美禰子は手帛に染み込ませ、「ヘリオトロープ」と言うのである。美禰子には明かに意図している所があると思われるが、三四郎も「ヘリオトロープ」によつて「四丁目の夕暮れ」や「迷羊」を思い出している。「ヘリオトロープ」に意味がないわけではない。

そもそも香水ヘリオトロープとは、ムラサキ科の植物ヘリオトロープの花を原料としたもので、この頃の代表的な輸入香水だつた(注5)。これだけでは何の解決にもならないが、ヘリオトロープという花の花言葉に注目し

たい。まず花言葉とは、花にシンボリックな意味を持たせたもので、日本では明治の初期に西洋の文化とともに伝わったものが、そのまま受け入れられた(注6)。ヘリオトロープの花言葉は「献身」「誠実」「熱望」(注7)「愛よ永遠なれ」(注8)「熱愛」(注9)など、愛を中心としたものである。美禰子はこの花言葉を知っていたのではないだろうか。知っていたとすると、三四郎が選んだ香水を「それに為ませう」とすぐ極めた」ことは、重要なポイントになる。三四郎にその香水を嗅がせて「ヘリオトロープ」と言ったのは、自分は三四郎ではない男のところへ嫁に行くことになってしまったが、三四郎に対する想いは愛であった。その想いを素直に表現することは出来なかったが、その想いは誠実であったと言いたかったのかもしれない。「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」とは、美禰子が「立派な人」と生活を共にしている限り、自分の心に背いて結婚したことを思い続けることを表している。

三、「森の女」について

もう一つの「森の女」というキーワードは、物語の最後のシーンで使われている。これは美禰子がモデルとなった絵の題としてつけられたものである。この絵の構図

は美禰子が指定したものであり、そこには何らかの意味が込められていると思われるが、それが野々宮宛なのか三四郎宛なのかで論が別れている。

このキーワードについて、助川氏の「三四郎」の時間」(注10)と、中村泰行氏の「三四郎」の「新しい空気」(注11)の池とその周辺の地図を使用して読み解いてみたい。

まず、使用する地図(注12)について記しておく。助川氏は、現在石橋のある㊦地点に当時も石橋があったと考えているが、もし正しければ、㊦地点において「石橋を渡った」(二)美禰子はかなりの遠回りをして㊧地点にいる「三四郎の前を通り過」ぎなければならぬ。更に、「渡らなければ真直に理科大学の方へ出る」(二)のではなく、医科大学へ出るようになってしまう。よって㊦地点にある、「重松氏が石橋という場所(注13)」に石橋があったものとして考えたい。中村氏の地図は、助川氏が考える美禰子・三四郎の位置はそのままに、石橋を助川氏の地図でいうところの㊦地点としたものである。

「森の女」は、美禰子が団扇を翳して立った姿を描いたものであるが、これは三四郎と美禰子が池の傍で初めて出会ったときをそのまま描いたものである。それ故、三四郎に宛てたメッセージであると解することが出来る。しかし助川氏は「漱石・避けて通ったもの」(注14)において、

三四郎が、森の女の構図を見た時、野々宮宗八もその背後から全く同じ構図を見ていたのだ。美祿子は野々宮との愛の断念として、画工の原口にこの構図を書かせる。

と、論じている。また、『三四郎』の「時間」では、

つまり、絵は、野々宮との結婚の不可能をほぼさと
りかけて美祿子が、野々宮との交際の日を記念する
ために原口に書いて貰っていた。三四郎が現われ、
自分への一途な愛を傾けていることを意識した美祿
子は、三四郎を傷つけないために、初めての出会い
をよく覚えていたという意味に、その絵が役立つこ
とを知って、とっさに十回の末尾で「あの画の通り
でせう」と言った。「森の女」は、対野々宮用と対
三四郎用との二重の意味を持っていたということであ
る。

と持論を補足している。

この論に一つの疑問が生じる。「野々宮との結婚の不
可能をほぼさとりかけて美祿子が、野々宮との交際の日
を記念するために原口に書いて貰っていた」絵を、「初
めての出会いをよく覚えていた」という意味に「とっさ
に」三四郎との思い出を描いた、としたことである。

助川氏は、「三四郎が、森の女の構図を見た時、野々
宮宗八もその背後から全く同じ構図を見ていたのだ」と

しているが、「野々宮との交際の日を記念するため」の
画を、野々宮と美祿子の間に直接接触が無かった瞬間を
切り取って、わざわざ画にすることがあるだろう
か。これについて、助川氏は

その石橋の向うへ美祿子と看護婦は消えたのだし、
野々宮は美祿子と会って、恐らく「蟬の羽根の様な
リボン」を購うことを頼まれたのだ。

としている。この場面の本文は次の通りである。

二人は申し合せた様に用のない歩き方をして、坂を
下りて来る。三四郎は矢つ張り見てゐた。

坂の下に石橋がある。渡らなければ真直に理科大学
の方へ出る。渡れば水際を伝つて此方へ来る。二人
は石橋を渡つた。

(中略)

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今迄
嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた。

(中略)

すると突然向うで自分の名を呼んだものがある。

三四郎は花から眼を放した。見ると野々宮君が石橋
の向ふに長く立つてゐる。

「君まだ居たんですか」と云ふ。三四郎は答をする
前に、立つてのそのそ歩いて行つた。石橋の上迄来
て、

このことから美禰子と看護婦が石橋の向うへ消えたのではなく、石橋を渡り、三四郎の前を通つて行ったこと(注15)の◎地点にあつたことと本文から、美禰子が三四郎の前を通り抜けるまでに死角はない。野々宮と美禰子が会つていたのでしたら、美禰子が岡に上がる前ということになる。しかし、看護婦同伴での恋人同士の逢瀬は考えにくい。では、野々宮との逢瀬の後看護婦を誘い、岡の上に現れたのかというと、その後を追うように野々宮が現れるのも不自然である。考えられるのは、看護婦と連れ立っている所に野々宮が出くわしたという設定だが、そこでわざわざ「『蝉の羽根の様なリボン』を購うことを頼」むとは思えない。また、自分から頼んで買つてきてもらった「極暑に限る」リボンを、秋に結ぶものだろうか。美禰子が自ら頼むのであれば、「極暑に限る」リボンなど頼まないだろうし、はじめから自分で買ひに行ったほうが早いだろう。このリボンは単純に野々宮からのプレゼントだと考えるのが自然である。よつて、この場面前後での野々宮と美禰子の直接的な接触は考えられない。

また、中村氏の地図(注16)と、美禰子が「夕日に向いて立つていた」、つまり西を向いていた(注17)、という

ことを照らし合わせて考えると、美禰子の正面にいたのは三四郎である(注18)。中村氏は、野々宮は◎地点にいたとしているが、「野々宮君が石橋の向ふに」立つていることや、三四郎が「石橋の上迄来て、『ええ』と云つた」ことを考えると、仮に野々宮が同じ構図を見ていたとしても、位置は◎地点ではなく、①になる(注19)のである。つまり、野々宮は斜め後方または全く後ろから美禰子を見ていた。「森の女」は美禰子の希望で団扇を翳している構図で描かれており、向きも本人の希望である可能性が高い。もし、助川氏の言うように、「野々宮との交際の日を記念するため」の画であつたなら、野々宮から一番よく見える構図にするだろうし、正面に居た三四郎を差し置いて、後方に居た野々宮へあてたメッセージだと考えられない。よつて、「森の女」は三四郎へあてたメッセージと解釈するのが妥当である。

ではそのメッセージとは何か。美禰子の肖像画を描くという話は、七章半ば、広田の家で原口によつて語られる。当人の希望で「団扇を翳して、木立を後に、明るい方を向いてある所を等身イソハタチに写」(七)すという。八章で原口が美禰子に「大晦日でも描、して呉れ」(八)と、急いで絵を描かなければならない旨を伝えている。次に絵が登場するのは十章であるが、このときには既に「何処も彼処も万遍なく絵の具が塗つてあるから、素人の三四

郎が見ると、中々立派である」(十)くらいに出来上がっている。三四郎と美禰子の会話にも、

「原口さんの画を御覧になつて、どう御思ひなすつて」

答え方が色々あるので、三四郎は返事をせず少しの間歩いた。

「余り出来方が早いので御驚ろきなさりやしなくつて」

「え、」といったが、実は始めて気が付いた。考へると、原口が広田先生の所へ来て、美禰子の肖像を描く意志を洩らしてから、まだ一ヶ月位にしかならない。展覧会で直接に美禰子に依頼してゐたのは、夫より後の事である。三四郎は画の道に暗いから、あんな大きな額が、何の位な速度で仕上られるものか、殆んど想像の外にあつたが、美禰子から注意されて見ると、余り早く出来過ぎてゐる様に思はれる。

「何時から取掛つたんです」

「本当に取り掛つたのは、つい此間ですけれども、其前から少し宛描いて頂いてゐたんです」

「其前つて、何時頃からですか」

「あの服装で分るでせう」

三四郎は突然として、始めて池の周囲で美禰子に逢つた暑い昔を思ひ出した。

「そら、あなた、椎の木の下に跼がんでゐらしたじやありませんか」

「あなたは団扇を翳して、高い所に立てゐた」

「あの画の通りでせう」

「え、あの通りです」(十)

と、語られている。「本当に取り掛つた」のは、原口から正式に依頼を受けてからであろう。では、「その前」とはいつのことを指すのだろうか。美禰子は「あの服装で分るでせう」と言つておきながら、自ら「あなた、椎の木の下に跼がんでゐらしたじやありませんか」と答えを明かしている。助川氏はこれを、「三四郎を傷つけないために、初めての出会いをよく覚えているという意味に、その絵が役立つことを知つて、とつさに十章の末尾で『あの画の通りでせう』と言つた」としている。だが、前述のようにこの絵は三四郎にあてたとすると、取り掛つたのは二人が出会つた頃だつたのではないか。構図はこの瞬間を切り取つて決定された。しかし、二人が初めて出会つた時、美禰子は野々宮と恋愛関係にあり、この時を描くのは野々宮との愛の断念とも、三四郎との出会いの記念とも考えにくい。考えられることは、美禰子は初めて三四郎に出会つたときから、次第に惹きつけられる様子を「少し宛描いて」、三四郎との出会いの記念にしようと考えていた。しかし、前記のように結婚を迫ら

れていた美禰子は、「絵端書の返事を下さらない」(一八三四郎に焦っていた。原口から正式に絵の依頼を受け、「少し宛描いて」いた構図を本格的に絵にすることに決めて、この絵に三四郎への想いを封じたのである。

以上考察してきたように、これらのキーワードに纏わる出来事から、美禰子の三四郎への愛が裏付けられる。

注

- 1 助川徳是「三四郎」の時間(一九八六年二月 重松泰雄編『原型と写像 近代日本文学論攷』(漱石作品論集成 第五卷三四郎)(一九九二年一月 桜楓社)所収
- 2 熊坂敦子「三四郎」と英国絵画(一九八二年五月『別冊国文学 14』『漱石作品論集成 第五卷 三四郎』(一九九一年一月 桜楓社)所収
- 3 三好行雄「迷羊の群れ―三四郎」夏目漱石(『作品論の試み』昭和四十二年六月 至文堂)
- 4 大野淳一注釈『三四郎』注(二〇〇二年十二月 岩波書店)
- 5 『国文学 解釈と教材の研究 明治世紀末』第四〇巻一―号(一九九五年九月 学燈社)
- 6 下中直也編『世界大百科事典』(一九八八年四月 平凡社)
- 7 金田初代・金田洋一郎『四季別 花屋さんの花 カラー図鑑』(一九九五年六月 西東社)
- 8 瀧井康勝「366日 相性花の本」(一九九五年十月 三五館)
- 9 瀧井康勝「366日 誕生花の本」(一九九五年十月 三五館)
- 10 小西友七・南出康世編集主幹『ジーニアス英和大辞典』(二〇〇一年四月 大修館書店)

11 助川徳是 前掲「三四郎」の時間
中村泰行「三四郎」の「新しい空気」(二〇〇一年十二月『立命館経済学』第五〇巻第五号)

12 なお、中村氏の使用している地図は、助川氏が「三四郎」の時間」で使用している地図を簡略化したものに、中村氏が考える美禰子・野々宮・三四郎それぞれの位置を記したものである。

13 添付資料1、2を参照のこと。

14 添付資料1のC地点。

15 助川徳是「漱石・避けて通ったもの」(昭和五十三年十一月『国文学 解釈と鑑賞』)

16 添付資料1参照。

17 添付資料2参照。

18 添付資料4参照。

19 この地図の方位から美禰子は三四郎の正面にいたと考える。

20 添付資料3参照。

この資料は、中村氏が使用した地図に筆者の考える野々宮の位置と、向いている方向を書き込んだものである。美禰子の位置は中村氏の考える地点、三四郎の位置は中村氏の考える地点に同意する。筆者が考える野々宮の位置はとする。それぞれの向いている方向は矢印で示した。この地図に書き込んだ方位は資料4を参考にした。

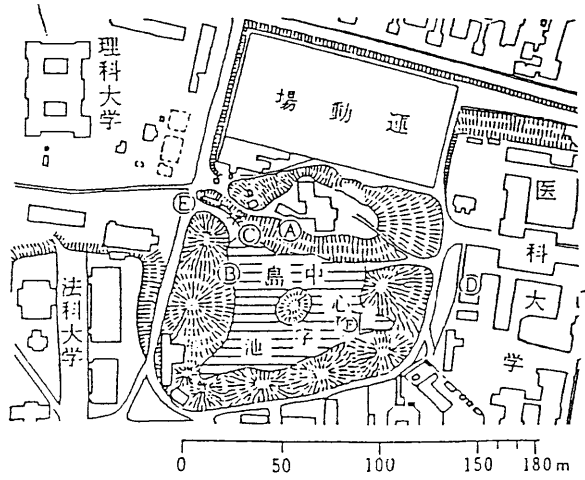
21 添付資料3参照。

22 なお、テキストは岩波書店『漱石全集第五巻 坑夫・三四郎』(一九九四年四月)によるが、一部を除いてルビを省略したことをお断りしておく。

(平成十七年三月三日)

(日本文学科一期生)

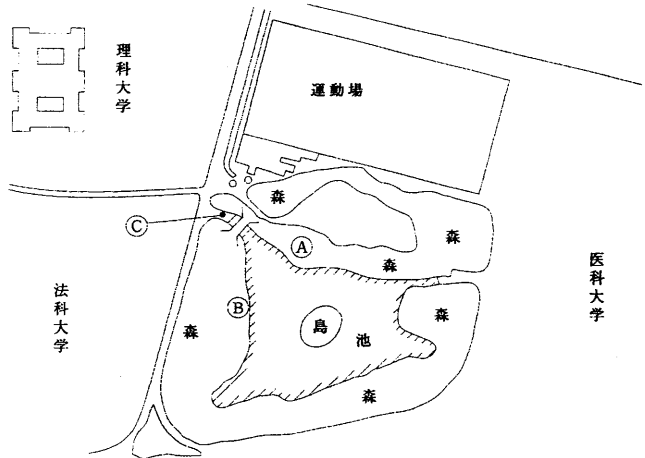
〈資料1〉



- ① 美禰子の位置
- ② 三四郎の位置
- ③ 重松氏が石橋という場所
- ④ 野々宮が三四郎に教える「アングルの良い」という建物
- ⑤ 三四郎が池の傍に入る場所
- ⑥ 現在石橋のある場所

(助川徳是 前掲『三四郎』の時間)

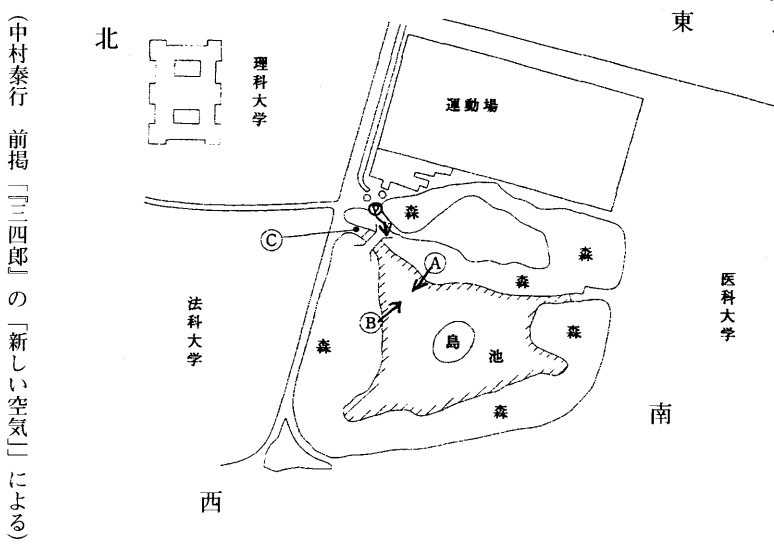
〈資料2〉



- ① 美禰子の位置
- ② 三四郎の位置
- ③ 野々宮の位置

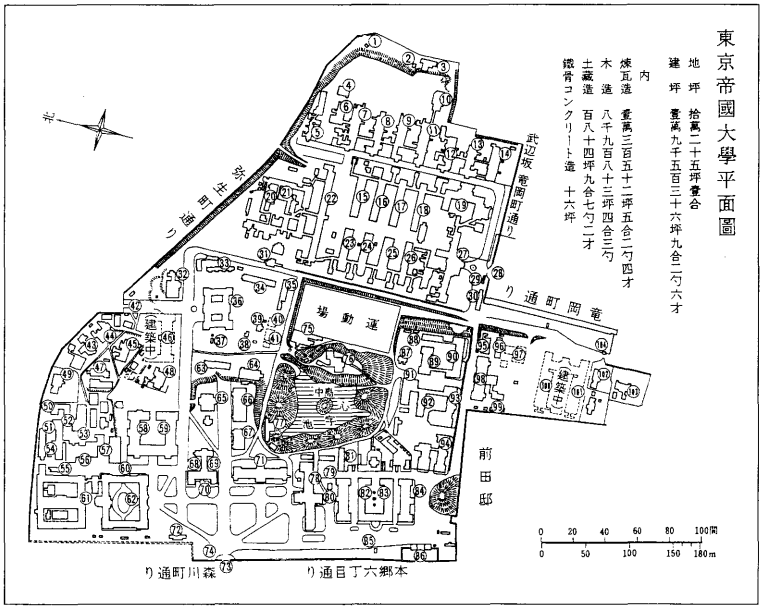
(中村泰行 前掲『三四郎』の「新しい空気」)

〔資料3〕



〔中村泰行 前掲「三四郎」の「新しい空気」による〕

〔資料4〕



〔三四郎〕關係地図（明治四一年頃 東京帝國大學構内）

〔日本近代文学大系第26卷 夏目漱石集Ⅲ〕
 重松泰雄注 昭和四十七年二月 角川書店